

論文審査及び最終試験又は学力の確認の結果の要旨

①・乙	氏 名	天野 志保
学 位 論 文 名	Relationship between Anemia and Readmission among Older Patients in Rural Community Hospitals: A Retrospective Cohort Study	
学位論文審査委員	主 査	深見 達弥
	副 査	新野 大介
	副 査	田村 研治

論文審査の結果の要旨

高齢者の貧血は年齢とともに有病率が上昇し、死亡率、認知機能低下、転倒などとの関連が報告されている。また、再入院率増加は日本の高齢社会の大きな課題である。申請者はこれまでに高齢者の貧血に対する医師の認識不足を報告しているが、本研究では高齢者の貧血が再入院率と関連しているかどうかについて検討した。対象は2020年4月～2021年12月の期間に島根県の中山間地域の病院総合診療科に入院した65歳以上の患者1,280名である。評価項目として、貧血の有無、Charlson併存疾患指数 (CCI)、機能的自立度評価 (FIM)、要介護度などを測定し、28日および90日以内の再入院をアウトカムとした。多変量ロジスティック回帰分析では、再入院との関連要因を解析した。対象者の平均年齢は84.9歳の超高齢者で、貧血有病率は36.4%、再入院率は28日以内で10.4%、90日以内で19.1%であった。結果として28日以内の再入院と有意な関連がみられたのは、貧血 Odds ratio (OR) 2.28 (95%CI: 1.56-3.33, $p < 0.001$)、次いでCCIスコア5以上 OR 2.03、FIM スコア OR 1.01であり、ORが貧血で最も高かった。年齢そのものは OR 1.00で28日以内の再入院との関連を認めなかった。更に、90日以内の再入院と有意な関連因子について、CCIスコア5以上 OR 2.19、貧血 OR 1.65 (95%CI: 1.21-2.24, $p = 0.002$)、要介護度 OR 1.55、FIM スコア OR 1.01といった順であった。これらの結果から、貧血は高齢者の再入院リスクを高める要因の一つであり、特に短期間 (28日以内) の再入院リスクが高いことが示された。高齢者の貧血は認識されにくく、超高齢者ではAgeismともあいまって治療介入の余地がある可能性が示唆された。貧血は、多併存疾患やADL低下よりも介入が容易なケースも多く、適切な管理と治療介入が再入院率の低減に寄与する可能性が明らかになった。本研究の限界として、単一施設研究で外的妥当性が限られること、またデータ収集期間がCOVID-19パンデミックと重なっており通常の医療提供とは異なる状況が考えられた。本研究結果からは、高齢者であっても生物学的年齢のみにとらわれず、普段からの健康状態を多職種で評価することによって適切で個別化された医療が高齢者に提供されることが望ましいと考えられた。世界的に高齢者医療のニーズが高まる中で、へき地をフィールドとした本研究は有用な知見であると判断した。

最終試験又は学力の確認の結果の要旨

申請者は、実臨床から浮かび上がったクリニカルクエスションに向き合い、研究を遂行した。先行研究の整理、本研究の成果、今後の研究の方向性を明確に示し、高齢者における貧血が再入院リスクを上昇させる可能性についての検討は、日本の今後10年を見据えた最先端の研究であることが示唆された。プレゼンテーションは明瞭であり、質疑応答においても適切に対応し、周辺関連知識も豊富であった。以上の点を踏まえ、学位授与に値すると判断する。

(主査 深見 達弥)

申請者は入院患者1,280名を対象として、貧血の有無、CCI、FIM、要介護度などを測定し、28日および90日以内の再入院をアウトカムとした検討を行い、貧血が高齢者の再入院リスクとなることを証明した。大変重要な報告であり、質問に対しても適切に回答でき、周辺関連知識も豊富であり、学位授与に値すると判断した。

(副査 新野 大介)

当該研究は後ろ向きコホート研究であるが、仮説、及び統計学試算がきちんと構築されており、その結果には新規性・再現性があり、又、次の介入研究を想起させる内容である。又、高齢者医療における種々の問題点をふまえた考察も優れていた。高齢者に対する過少医療 (エイジズム) を問題点として、貧血に対する適切な治療介入が、再入院の減少につながる可能性を示しており、日本における高齢者医療、地域医療の側面からも重要である。以上の点を踏まえ、学位授与に値すると判断する。

(副査 田村 研治)